

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献 『デーナカルド』第3巻訳注・その2

青 木 健

序文

本稿は、青木健、「ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーナカルド』第3巻訳注・その1」、『東京大学東洋文化研究所紀要』第146冊，pp.281-312を承けての続編である。解説と、第6章から第9章の訳注については、前号を参照して頂きたい。本号では、『デーナカルド』第3巻の第10章から第26章、内容的には、異教徒の質疑（第12問）と、弟子の質疑（第1～16問＝全）をカバーしている。

なお、PC入力については、今回も東洋文庫臨時職員の深見和子さんのお世話になった。記して感謝したい。

第11ページ転写

(10) 12-om pursišn⁽⁴⁶⁾

pursīd kū ēn hamāg was +mansar ošmurišnīh ī
šmāh
mānsar gōwišn ī Ohrmazd būd saxwan pad oš-

46 Madan 版第11ページ第4行目から。

murišnih ō
pādīrānih ī az xwēš kārīh rasišnīgih čim ud ruwān
+bōzišnīh⁽⁴⁷⁾
rāy mānsar Gāhānīg drahnāy ī Ohrmazd guft
bowandag :

passox

hād hamāg mānsar ōšmurišn ī amāh dād <ī> Ohrmazd

gōwišn ī paymān ī abāg mēnōg ruvān bōzišnīh
gētīg-iz
framāyišn ī +frahang abzār ī abar dādār šnāhīh
u-š
kām warzīdārīh mēnōgān yazadān ud dēwān-iz
andar dānišnīg
ud yazadān yaštārīh ud šnāyēnidārīh ud dēwān
ayaštārīh
ud bēšīdārīh tā <d>ādīg ud hādīg [ud] mān-
sarīg Gāhānīg dāšn ī
kunišn ī andar dādīg ud hādīg mānsarīg Gāhānīg
zamānag ō

47 写本では、bwzšmyk とある。しかし、bōzišn=救済に形容詞化語尾 -īg が接続しても、文意は通らない。Menasce[1973:34]は、更に抽象化語尾 -ih を加えて、bōzišnīgih=salut と訳しているが、形容詞化語尾と抽象化語尾の連続は普通はあり得ない。ここでは、-īg を -ih に改め、bōzišnīh=救済性と解した。

kār ī abērdar barišn u-š šnāxtan ud padiš
xwadāyih
ud sālārīh ud dādwarīh zamānag rāyēnīdan ud
dahišn paywastan
druz wānīd<an> ud az dām bē burdan dām bizi-
škīh ud rāyēnīdārīh
ud +gyānān dahišnīh⁽⁴⁸⁾ was gēhān mardōm
frahaxt būd <ud>
bawēd [ud] āgāhīh ud ēd-iz rāy kū ka ahlo-
mōy ō
Dēn kōšīšn rasānd pad dahišn +frahang ud abzār
ī aziš

第11ページ翻訳

(10) 第12問 (長々と、そしてくり返し唱える要があるのかと問うている)

問うて曰く「あなた方の(唱えている)この(しかも)多く(くりかえされている)
マンストラ^{ふうしょう}諷誦はみな(それ自体)

48 写本では、w yšn dhšnyh とある。Menasce[1973:35]は、これを wāyīšn dahišn = gouverne et délivre と解している。しかし、文章をここで区切ってこの語を次の一文の主語とすると、「啓蒙される」の主語が gouverne et délivre になってしまう。ここでは、dhšnyh の -ih をそのまま生かし、-ih の抽象語尾で終わる名詞の列挙が、16行目の ō からここまで繋がるとう理解するべきである。その為、w を単独で接続詞 ud と取り、続く単語をイデオグラムの HYA+ān で gyān-ān と解した。(ここの部分の emend が、若干苦しい。)この場合、dhšnyh は、そのまま抽象語尾を生かして dahišnīh で通る。

Ohrmazd の (託された) マンスラ詠唱であった (からには), 諷

誦すること (だけ) では (それらの) 語が

責務実践 (xwēškārih) からの退転になるというのはなぜか。

そして靈魂救済

のためには Ohrmazd の唱えたマンスラの Gaθā の長さで

十分だ」と(49)。

答弁

さて、われらのマンスラ諷誦はみな Ohrmazd の法 (掟),

節度 (paymān) の発語であり, メーノーグ的救霊とともに

ゲーティーン格的にも

教養の命令であり, 創造主を知るについての要具であり,

また 彼の

49 ゴロアスター教の聖呪は、時代が下ると共に「浮動詞句 (どこに挿入しても構わない信仰告白文)」を次々に挿入して、長大化する傾向にあった。神官団にとっては、唱える聖呪が長大化するほど聖性が増し、且つ一般信徒からの寄進が増大するので、これは歓迎すべき事態だった。しかし、一般信徒から見れば、祈祷の文句が無意味な繰り返して延びて、その分だけ必要な寄進が増えるので、好ましいことではなかった。800年代後半には、当時の指導的ゴロアスター教神官の兄弟が、聖呪を簡略化するか否かで大論争を行っている。結局、保守的な主張をした兄の大神官が論争に勝利し、聖呪は長大さを保ったのだが、この一件が、ゴロアスター教がペルシア人の信を失う原因の一つになったと考えられている。ここで提起されている疑問も、この時代背景を考慮すると分かり易い。ゴロアスター教神官に対してこのような疑問を投げ掛けるのは、改宗したばかりのペルシア人イスラーム教徒だと推測される。

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その2
御意実践（のそれ）であり、メーノーグ的諸神や諸魔をも識知

する（それ）であり、

そして諸神を祀って満足させる（それ）であり、また諸魔を
祀らず

且つ苦しめる（それ=要具）である。遂には（tā）法律篇⁽⁵⁰⁾と

Hāiti-（ヤスナの区分呼称）⁽⁵¹⁾ とに基づくマンストラと Gāθāとの賜
たる、法律篇と Hāiti とに基づくマンストラと Gāθāとの待機
の中での営為が、

特別な行動の開始やその識知、及びそれによって

王政

や首長職や司直の時機を確立すること、及び

創造物の統一

ドルズの制圧、及び創造物からの排除、創造物の治

病と確立

および生類の創造となり（ō 1.16）、多くの世人

が啓蒙されたし、また啓発されるだろう。そして（このこと
は）まさに このためである、即ち 異教徒共が

Dēn 攻撃にやってくる時、創造物の教養と それから出る

50 ここで「法律編」というのは、原語 dādīg で、サーサーン王朝時代の『アヴェスター』3分類の一つである。

51 ここで「Hāitiに基づく」というのは、原語 Hādīg である。『デーンカルド』第8巻では、『アヴェスター』を①ガーサー編（Gāsīg）、②マンストラ編（Mānsrīg）、③法律編に分けて解説している。このうちの前2者はヤスナと関係するから、それらを含めてこう呼称していたと考えられる。上記の dādīg と併せて、『アヴェスター』全体を指し示している。

力 (abzān) を以て,

第12ページ転写

hamāg hammōg ēraxtan ud škastan abāz abgandan

az Dēn <ud>

Xwadāyīh ud gēhān <wi>zend abāz dāštan čār bawād

∴ (止)

(11) 16 ī hāwišt pursīd ēk pursīd

im kū ka abar ān srūd-gāhān kirbag padisāy

madan ī ō kirbag nērōg +padīr <ī> weh mēnōg zōr

ud rasīdan ī

ō pahlom axwān adāšnīh paydāg az Weh Dēn abāz

stāyīdan⁽⁵²⁾ any-iz marg-arzān ačārīh ī kirbag ī ō ān

nērōg

52 第11章理解の鍵になる語である。この abāz stāyīdan は、「再び or 後ろへ」+「讃えること」で構成されている。問題は、この abāz 解釈である。「再び」と解すれば、「何度も讃えること」となる。しかし、「後ろへ」と解すれば、「讃えることを止めること」となる。どちらをとるかで、文意は正反対になる。

Menawsce[1973:35]は、後者をとって、un reniement と訳している。後続の「死罪相当の罪」を同格と見れば、「信仰誹謗」の訳語に理がある。しかし、答弁の方では、「abāz stāyīdan の後には報償が控えている」とされ、この語にプラスのイメージを予想している。同じ文脈中にある1つの語句が、プラスとマイナスの正反対の語義をもって使用されていることになる。

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーナカルド』第3巻訳注・その2
ud gyāg mad<an> čim gōwēd ˙˙

passox

hād kara kirbag ī ō ān nērōg dād nēst<ih> nē
dānam
ud ačār [ud] kirbagih az abāz stāyidan ī Weh
Dēn ud any-iz
marg-arzān pasih ī az spōxtan ī kirbag mizd
ō tan ī
pasēn nē Weh Dēn nēst +šāyīdan⁽⁵³⁾ ī kard
kirbag nēst
čiyōn dast⁽⁵⁴⁾ ī ačār andar <w>ēzišn⁽⁵⁵⁾ nē nēstih ī
ān dast bē
pasih ī az ān ī nazdist dast ˙˙ (止)

53 写本では, šytn' とある。Munasce[1973:35]は, vaštan=transforme ととっているが, 素直に šāyidan で意味は充分通じる。

54 写本では, dst' とある。しかし, Munasce[1973:35-36]は, yašt=「ヤシュト(祭儀の一種)」ととっている。ここをそのまま dast=「手」ととるか, emend して yašt=「ヤシュト」ととるか, čiyōn 以下の比喩が全く違ってくる。dast なら, 本稿に掲げた訳文が形成される。しかし, yašt なら, 「崇拝の途中での不可避的ヤシュトは, ヤシュトの無効化ではない」との訳文になる。

55 写本では, yzšn' とある。ここの読みは, 上記の dst' 理解と連動して変化する。Munasce[1973:36]は, dst' を yašt に emend したので, こちらは yazišn=「崇拝・礼拝」ととっている。逆に, dst' をそのまま dast でとった場合, こちらを emend して <w> ēzišn=「(矢を) 射ること」にしなくてはならない。

pursīd kū ka guft Ohrmazd nimūdan ī ō Maš-
yag <ud>

Mašyānag⁽⁵⁶⁾ būd paydāg [ud] fradom <Ĵam> ō
hampursīd pas az

Mašyag <ud> Mašyānag pad čand paywand būd
guft čim

passox

hād hampursagīh ī ō Ĵam pad fradomih paydāg
andar

Mašyagīgān ī pad ēwāz ī šahr mardōmān bawēd
pas

第12ページ翻訳

(Dēn の) 教えを告発して破壊するのを(奴等のもとに)投げ
返し Dēn と
王国と世界とから災害を排除する手段が生ぜん
がためである。

56 人類の始祖である兄妹の名称については、異読が多い。Munasce[1973]は Mašya
と Mašyāni としているが、本稿では Mašyag と Mašyānag で統一する。

(11) 弟子が問うた16(問)。(第) 1 に問うたは⁽⁵⁷⁾

これ、曰く「Gaθā 諷誦の功德(善行)について、

善行の力になり、よきメーノーグ力の取得

および 最勝界

に到達するのに (padisāy), 善教批

謗やその他のマルグ・アルザーン罪のために賜とならぬことが明らかであるのに(

ka, 1.4), そのような力や

境涯に到るのに善行は不可避であると、なぜ言うですか」と。

答弁

さて、そのような力に(到達する)ためになされた善行の恩典は

何でもないものとは 私は思っていないし

また善教批謗やその他のマルグ・アルザーン罪からでも

善行の

不可避性があるし、善行排除のあとには報償が(控えている)。

復活後の最終身体⁽⁵⁸⁾に到る

までは 善教がなくなるとか なされた善教が(よくなす)力をな

くする ということはなく、(そのことは)

57 これは、第16問まで続く。

58 原語は、tan ī pasēn。伊藤氏の本来の訳語は「後得身」だったが、意味を汲んで「(復活後の)最終身体」と訂正した。最後の審判の後に、人類一人一人が肉体を伴って復活した際の身体のことである。

宛かも（矢を）射る（放つ）のに不可欠な（両）手のことだが、その
ような手が何でもないものではなくて
（一つの）手のうしろには至近のところに（もう一つの）手があるような
ものである⁽⁵⁹⁾。

(12) (第) 2 に問うた。

問うて曰く「オフルマズドが言いたまい、マシュヤグとマシュヤー
ナグ⁽⁶⁰⁾へのご下命が
生じたと（Dēn に）明かされているのに、マシュヤグとマシュヤー
ナグからのち 幾世代
もたった時に ジャム⁽⁶¹⁾が最初に対話したと（Dēn が）
言っているのは なぜですか」と⁽⁶²⁾。

59 「宛かも」以下の比喩の理解に2つの可能性があることは、転写部分の注で触れた通り。サーサーン王朝時代の「弓射」に関する言及は、皇帝や貴族の武勇を示すパフラヴィー語碑文（例えば、シャープフル1世の Hājji Ābad 碑文）に多く見いだされるが、神官階級の文献では殆ど例がない。しかし、善教の必然性に対する比喩としては、「弓射」の方に理があるので、こちらを採用した。

60 ゴロアスター教の神話（『デーンカルド』第7巻第1章第9節）では、最初の人類であるガヨーマルドから生まれた兄妹。ゴロアスター教の教義に従って最近親婚を行い、以後の人類の始祖になった。

61 Av.Yima-, MP.Jam-, Skr.Yama-. ゴロアスター教の神話（『デーンカルド』第7巻第1章第20節）では、マシュヤグとマシュヤーナグの兄妹の次に、オフルマズドに接見したことになっている。

62 この質問は、『デーンカルド』第7巻第1章の矛盾を突いている。ゴロアスター教神話は、複数の神話群を統合して形成されている為、必ずしも整合性がない。この場合、別系統の英雄神話を、一連の預言者伝説としてシリーズ化しているの、相互に矛盾が生じている訳である。

答弁

さて、ジャムとの対話が最初にあったと明かされている。

国語で

は人間（の意）であるマシュヤグの子孫のなかには

第13ページ転写

az Mašyag <ud> Mašyānag kē ul hambasān ō

guftan nimūdan ī

Ohrmazd az ān ō Mašyag ud Mašyānag

nē Mašyag ud Mašyānagīg

be <az> xwad Mašyag ud Mašyānag kē-šān Mašyag ud

Mašyānagīg

Ĵam-iz az paywand būd u-š ēn čim kū ka ham-

pursagīh

kamist mayān ī 2 pad guftan <ud> passox bawēd

ān ī az Ohrmazd

ō Mašyag ud Mašyānag guft-ē ud nimūd-ē būd

nē hampursagīh ī

guftīg ud passoxīg čiyōn amāh fradom abāg Ĵam būd

paydāg ∴ (止)

(13) pursid 3

pursid kū ān ī guft ēstēd kū ka gōšodāg⁽⁶³⁾

yazēd har xwarišn pādixšāy xwardan abārīg ān
pādixšāy

xwardan ī ōh yazēd ud āb yazēd āb pādixšāy

xwardan čim ˘˘

passox

hād andar gōšodāg urwar ud āb-iz astih nē

ka

+gōšodāg yazam urwar ud āb-iz yaštih⁽⁶⁴⁾ ud az ān
bē⁽⁶⁵⁾

arzānīgih ī yaštār pad har xwarišn ud xwārišn

<ka> drōn yazēd

urwarīgih ī drōn pad sāxtagih pad drōnih

radih ī abar

63 写本では、gwšwd'n'k'とある。前肢 gōš=「牛、犠牲獣」は確実であり、また、文脈上は祭儀の際の供物である。おそらく、Av.gaoš.hudāに由来する単語なので、gōšodāg=「肉餞」と解釈した。このゴーショダグは、現代のパールスィー神官の間ではバターで代用されている。サーサーン王朝時代には、本来の犠牲獣の肉を用いたのか、バターで代用していたのかは不明。

64 写本では、yštkyhとあり、Munasce[1973:36]も yaštakihととっている。直前の yazam=「私は供進した」とパラレルの意味を、動詞を用いずに抽象名詞で表している。

65 この az ān bē を、Munasce[1973:36]は一纏まりで en outre と解している。しかし、az ān と bē で区切り、前者を理由を表すと取り、後者を bē ō で到達する目的を示すと解釈すべき。この章では、この構文が頻出している。

hamāg ī urwarīg sāzišnīg āb ī andar urwar

rāy har urwar ud

+urwarīg sāzišnīg ud āb-iz yaš az ān bē⁽⁶⁶⁾

arzānīgih ī

yaštār pad har urwar ud urwarīg sāzišn<īg>

xwardan āb

xwārdan ud ka nē drōm bē any tis ī ān ī

az urwar

yazēd ka urwar ud āb ī andar yaštāgih

ud az ān bē⁽⁶⁷⁾

第13ページ翻訳

Ohrmazd から出た彼(主)の発言と下命に楯ついた

マシュヤグとマシュヤーナグののちに、(その)マシュヤグとマシュヤーナグ

— マシュヤグとマシュヤーナグの子孫ではなく

てマシュヤグとマシュヤーナグ自身、(即ち)マシュヤグとマシュヤー

ナグの後裔が属するところのもの — に (ō, 1.2)

ジャムも亦 系譜を通して所属しているのです (būd)。そしてそのわけ

はこれです、即ち 対話なるものは

少なくとも二者の者で語りかけと返答によって成り立つから (ka),

オフルマズドから

マシュヤグとマシュヤーナグに語られ且つ下命されたことはどれ一つも

66 注65参照。

67 注65参照。

語りかけと返答で成る

対話でないことは 宛も ジャムと最初の(対話)が行われた
(būd) ことが我々に明かされているようなものである⁽⁶⁸⁾。

(13) 問うた(第)3(問)

問うて曰く『肉餞(またはバター) (gōšōdāg)⁽⁶⁹⁾を

供進する時はどんな食物をたべることを許されるし、このように供進
するその他のものもたべることを
許される、然るに水を供進する(時)は水(だけ)を飲むこと
を許される』
と言わしているのは なぜか」と。

答弁

さて、(なるほど)肉餞の中には植物とそして水も存在しない。

68 オフルマズドとマシュヤグ・マシュヤーナグ兄妹の間で行われたのは「一方的命令」であり、オフルマズドとジャムの間で行われたのは「双方向的な対話」だったと解答している。確かに、『デーナカルド』第7巻第1章では、オフルマズドとマシュヤグ・マシュヤーナグ兄妹の接見に際しては、gōwišn ī Ohrmazd paydāg (第9節)と、一方的に啓示が降された表現であるのに対し、オフルマズドとジャムの接見に際しては、ān ī Ohrmazd hampursagih ō Jamšēd (第20節)と、対話した表現になっている。しかし、実際には、ジャムの場合でも「会話」が成立している訳ではなく、オフルマズドから一方的に啓示が降っているだけで、実質的な差はない。この解答は、表現上の詭弁である。

69 注63参照。

(だが) わたしが

肉餞を供進するときは、植物とそして水も供進したことになる。

そして そのことから (az ān)

そのすべてを食し且つ飲むことによって供進者の資格に (bē=
bē ō) 到達する。

ドローン (聖パン)⁽⁷⁰⁾の植物性は (その) 調製にとって生じる。ドローンたる
地位には植物製

の一切に君臨するラド (指導者) の地位がある。植物の中にある水の
故に、植物と

植物製のもののみなど、さらには水も供進されたことになる。そのことから
(az ān) (その人は) 植物と植物製のをみな

食べ 水を飲むことによって

供進者の資格に (bē, 1.19=bē o)

到達するのです。またドローンではなくて 植物出来の
別の物を

供進する時は 中に植物と水があるので供進したことになり

そしてそのことから (az ān)

70 Av.draonah-, MP.drōn, NP.darūn. アヴェスター語の段階での語義は、祭式の際に犠牲獣の一部分を神前に捧げること、或いは、捧げる犠牲獣自体を指す。しかし、パフラヴィー語の段階以降は、語義は転義して、平たく丸い小麦パンを指す。このドローンが必要な祭式は、ヤスナ祭式、ドローン・ヤシュト祭式、ウィーデーウダード祭式、ウィスペラド祭式、アフリリーナガン祭式の5つ。現代のパールスィー神官は、ドローンの中央にゴーショダグ (肉餞またはバター) を置いて、ドローンは植物の王国を、ゴーショダグは動物の王国を象徴すると解釈している。そして、これらを前に置き、ヤスナ 3-8 を唱えつつ両物質世界の平安を祈願するのである。M.Boyce and F.Kotwal, "Zoroastrian bāj and drōn," *BSOAS*, 34, 1971, pp.56-73, 298-313参照。

第14ページ転写

yaštar arzānīgih pad ān urwan xwarriš āb
xwārišn ud ka
āb yazēd 《[ud] ēwāz āb yaštaġih》 nē yaštār
arzānīgih
pad [ud] āb ēwāz xwārdan ˙˙ (止)

(14) 4 pursīd

pursīd kū ān ī guft ēstēd kū az +petitīg⁽⁷¹⁾ bē

rāh ī ō dušox nēst čim ˙˙⁽⁷²⁾

71 Av.paiti.ita-, MP.petit, NP.patet. アヴェスター語の原義は、「元に戻ること」。ここから転義して、悔悟、贖罪、後悔の祈禱句を指すようになった。ゾロアスター教では、清浄儀式の執行の際、オフalmazドに罪を告白して贖ってから、象徴的に肉体を清める。これによって、心身共に清浄になるとされる。ペティートは、具体的には、この儀式の際の祈禱句である。この転義と意味内容の点では、ペティートと旧約聖書「詩編」のヘブライ語 t'shūbāh との類似性も指摘されている。なお、パフラヴィー語文献では、ペティートは4種類に分類される。①アードゥルバード・イー・マフラスパンダーンの悔悟（後悔の悔悟）、②アールリア人的悔悟（イラン人の悔悟）、③自己の悔悟、④ワドゥルデガーンの悔悟（死者の靈魂の悔悟）。Ōshidari[1999:195]参照。

72 この問いは、パフラヴィー語文献 *Gojastag Abāliš* (『呪われたアブドゥッラー』) の第3章第1節と連動している。本書は、『デーンカルド』の編者であるアードゥルファッローバイ・イー・ファッロフザーダーンと背教者アブドゥッラーが、カリフ・マムーンの御前で討論した記録とされているので、歴史的な関連も予想される。Homi F. Chacha, *Gajastag Abāliš*, Bombay, 1930, p.64参照。

passox

hād [rāh] rāh ī ō dušox pad rēmanih ī ruwān az

wināh [ud] wizāriš ud yōjdāhrīh 《darmān ī az
wināh》 andar We-

h-Dēn ōšmurišn u-š dastwar ruwān bizešk
āgāhīh +waxš-

igdar⁽⁷³⁾ kū dārū<g><ī> abārīg har wēmārīh andar
pēšag ī tuwān⁽⁷⁴⁾

bizeskīh ud āgāhīh ī ān tan bizešk rēman<īh>
ud ālūdagih ī

pad wināh ruwān ka abāg pašēmānih ī menišnīg
ud

abaxšīh ī gōwišnīg-iz az wināh +petīt ī ku-
nišnīg az Weh

Dēn dastwarīh framāyišn az Weh Dēn dastwar
《ruwān

bizešk》 čiyōn wizārdan [ī] bawēd 《kard <an> ruwān
az wināh rēmanih

73 写本では、whšnyktr とある。emend して waxšigdar = 「(より) 精神的な」とした。別解として、waxšišnigdar = 「(より) 輝ける」の haplographic ととることも可能。

74 写本では、twb'n とある。Munasce[1973:37]は、+ruwīn = 「靈魂」と emend するが、文脈上、その必要は全くない。

ud ālūdagih yōjdāhrēnīdihistan》rāh ī az dušx

owōn

brīnid⁽⁷⁵⁾ bawēd čiyōn wēmār-tan āhuft tan wēmārīh

ō

bizešk ud drustabed pad darmān<ni>māyišn dahišn

[ī] +u-š tan

az wēmārīh bizeškīh ud abāz ō drustih mad ∴ (止)

(15) 5 pūrsīd

pūrsīd kū az kunišn ī mardōm čē gēhān sūttar

第14ページ翻訳

その植物を食し水を飲むことによって 供進者の資格に (bē 前

文の最下行=bē ō) 到達するのです。しかし

水を供進する《水だけを供進する》のでは、水だけを飲む

ことになって供進者の資格はないのです⁽⁷⁶⁾。

(14) (第) 4 に問うた

問うて曰く「『悔過^{けか}からは悪界地獄への道に到ることなし』と

75 写本では、psywnytとある。しかし、このままでは意味が通じないので、イデオグラム PSKWN-yt=brīn-id=「切る」の誤記と解した。

76 注70参照。ドローンを必要とする祭式では、ドローンとゴーショダグを併用することで、儀式が完成する。水の供進だけでは、儀式が成立しない。

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その2
言われているのはなぜですか」と。

答弁

さて、悪界への道は魂のけがれと共にある。罪悪

からの離脱と祓浄(きよめ)《罪悪から免れる

薬劑》は善

教の修得にあり、そして その指南者(ダストワル)は魂の

いやし手(医師)の明知で、それは身体のいやし手(医師)

がもつ職業上の有能な治療術や明知における、万病

に対する 他の薬よりももっと靈的である。罪悪による

魂のけがれと汚染

は心による懺悔

と

語による贖罪しよくざいを伴い、行いによる罪悪悔過けかから発する —

いかにすれば(čiyōn) 離脱がおこる《魂を罪悪のけがれ

と汚染から祓浄することをなすこと》について、善教の権威(及び)

善教の指南者《魂のいやし手》

から出る命令に従って(az, 1.14) — 時に(ka, 1.13), 悪

界からの道が

切断されること 恰あたかも肉体を病む者が身体の病気を

医師に見せ、そして主治医が薬を処方して投与し

彼のからだから

病気から治りそして健康体に復帰するようなものである。

(15) (第) 5 に問うた

問うて曰く「人の行為のうちで、何が世を最も利益し、

第15ページ転写

ud čē yazadān šnāyišndar ud čē dēwān bēštar

ud čē

abardan <ī> hamāg'.

passox

hād az kunišn ī mardōm gēhān sūttar ērih ī

andar

ōy ī huxwadāy dahibed dād fragān ī framān gēhān

winārišn

ud yazadān šnāyišndar āstawānih abar Dēn

Māzdēsna kirbag dām ī

dāštār ' : ' < > ud abardar ī hamāg xrad rādēni-

dārīh ī ō

xrad arzānīgān zahag ī har ahlāyih ' : ' (止)

(16) 6 pursid

<pursīd> kū hudēn⁽⁷⁷⁾ kas kē-š pēšēnīg ud Dēn

dastwarān

čāštag čāštag-ī nē grift ēstēd andar frāz rasišnih

ī

kār ud dādestān abar ān ī pēšēnīg ud Weh-Dēn dast-

warān

padiš jud dādestānih ān ī kadār dastwar čāštag

niyōšišn gīrišn kunišn ‘.

passox

hād ōy +hudēn ān⁽⁷⁸⁾ +niyōšišn gīrišn ud kuni-

šn pad dast-

warih ī ōy kē andar āwām +pēšōbāy ī Weh-Dēn

ud abārīg

Weh Dēn burdār ī ōy hamband šāyēd ka ō

ān dast-

warih an-ayāb [+i] Weh Dēn bowandag [ud] menidār-

ihā ān ī ēk

ud az čāštag ī awēšān pēšēnīg ud pōryōtkēš

77 hu = 「良き」 + Dēn。Weh = 「善なる」 + Dēn と同義語で、ともにゾロアスター教を指す。翻訳に際しては特に両語を区別せず、「善教」で統一する。

78 Munasce[1973:38]は、hudēn = mazdēen を主語にしているが、ān ~ kunišn を主語ととるべき。

ud dēn

dastwar būd hēnd andar atarmenīdārīh ī ān

ī nēw pōryōtkēš

ud dēn dastwar čāšt xānīg +niyōšīdan

griftan kardan padīš

ōst[ān]īgān +winnirdan xūb ˙: (止)

第15ページ翻訳

また何が神々を最も喜ばせ、また何が諸魔を最も苦しめ

また何が

すべてのうちで最高なのか」と。

答弁

さて、人皆の行為のうちで世を最も利益するのは善治（善政）

の国王の

法にあるイラン性・世界統治（治世）の命令の

基盤であり

又神々を最も喜ばせるものは マズダー教への帰依、

創造物を支える

善行である。〈長文欠如〉。またすべてのうちで最高なものは

知恵をうけうる有資格者たちへの

知恵の恵与・あらゆる天則的なものの生みだし手である。

(16) (第) 6 に問うた

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その2
問うて曰く「善教の人にして、先出の善教の指南者

たちが（それぞれの）所説において（padiš）意見を異にして

いるところの事柄について（abar ān ī...）⁽⁷⁹⁾（彼自身の）行動と判断

（kār ud dādestān）を提起して（andar frāz ras），

先出の Dēn の指南者たちの所説のうちどの所説をも受入れて

いない者は、どの指南者の所説を

聴き、受け入れ、実践すべきでしょうか」。

答弁

さて、その善教者は、その聴徒^{ちょうじゅう}、受容 及び 実

践は当時の善教の守教

たるもの

やその他

彼との連帯者たる善教奉持者の指南によって許されるのです。

そのような善教の指南

に出くわさない時は⁽⁸⁰⁾、完璧に考え

79 サーサーン王朝時代の神官階級の意見の分裂については、特に『アヴェスター』
解釈の相違が指摘されている。例えば、注釈者の Weh Šābuhr は、フスラウ1世
の御前会議で他の神官と対決して、自説を押し通している。また、『アヴェスター』
解釈の流派として、少なくとも Sōšāns 派、Abarag 派、Mēdōgmāh 派の3つがあっ
たことが知られている。、E.W.West (tr.) *Pahlavī Texts Part II: The Dādistān-ī
Dīnik and the Epistles of Manuškihar*, Oxford, 1882, pp.300-01参照。

80 Munasce[1973:38]の翻訳では、この後に qu'il écoute, admet et met à exécution
とあるが、このような文章はパフラヴィー語原文には存在しない。

て

先出の先師やデーンの指南者であった方々の所説の中
の一つを

— (といっても)

よき先師

やデーンの指南者の所説《源泉》を軽んじないで — 聴き
受容し実践しそれに

^{けんしん}堅信し安住することがよいのです。

第16ページ転写

(17) 7 pursid

pursid kū mehīh ī dēn-burdār az dēn <ān ī> xwadāg
az
xwadāyīh ud <ān ī> dānāg az dānāgīh čim <čē> ‘:

passox

hād mehīh dēn burdār az dēn čim ēk rawāgīh<ī>

dēn pad dānāgīh <ī> dēn burdār ud ān ī xwadāg az
xwadāyīh čim

ēk < >⁽⁸¹⁾ winārdan < > ī dānāgīh čē dānāgīh
čiyōn har-azišīh pad

81 写本に欠落が多い。文体論的にも、訳出は困難。

xwadīh < > winnirdan šāyistan ud abāyišnīg-

ih ī dānišn ō sūd

sūd ō xwēšāwand rāy ʾ: (止)

(18) 8 pursīd

pursīd kū dast ī hōy +kē⁽⁸²⁾ barsom padiš grift

andarz ī

dēn padiš paydāg čim⁽⁸³⁾ [ʾ:] kē mardōm pad dast ī hōy

dārēnd čē ʾ:

passox

hād az-iz xwaršēd ō ul waxšišnih az xwarāsān <kas

ō xwarāsān>

abāxtar +hōy⁽⁸⁴⁾ kas ō xwarōfrān ud dašn ō [+hōy]

abāxtar +hōy⁽⁸⁵⁾

ō nēmroz im hangōšīdag[ī] mardōm ō xwaršēd

wēnihēd

82 写本では、MN とある。ここにイデオグラムの az があっても文意は通じないので、MNW と emend して、イデオグラムの kē ととった。

83 ここは、paydāg で区切るか、čim で区切るか、判断が難しい。前者の場合、ここで掲げた訳になる。後者の場合、「デーンに…と啓示されているのは何故か？左手で…は何故か？」と、同趣旨の疑問文を2回連続する訳になる。両方可能。

84 写本では、wywd とあるが、文脈的には hōy = 「左」とあるべき。

85 注84参照。同様の誤記をしている。

kū abāg ān ī-šān rōy ō xwarōfrān ud dašn ō

[ō]

abāxtar hōy ō rapihwīndar bawēd šnāxtan šāyēd kū

+hōy

dast kē +barrom padīš burdan yazadān yaštān padīš

Weh

Dēn andarz ēn ham ī mardōm pad dast <ī hōg>dārēnd

hammis abārīg

hannām ī hu kust ī pad Ohrmazdīg +dādestānōman-

dīh ud ul

rasišn ī ō pērōzīh guft ēstēd ∴ (止)

第16ページ翻訳

(17) (第) 7 に問うた

問うて曰く「奉教の偉大がデーから、王者のそれが

王

道から、そして知者のそれが有識から出るわけは何ですか」と。

答弁

さて、奉教者の偉大が Dēn からくる理由は、一つには奉教者の知識

によるデーの進展である。また王者のそれが

王道からくる理由は

一つには統治< >。<また知者のそれが>有識の

く > , 何となれば有識は本源 (万有の本源) が
自性によってく > ように (čiyōn) 存立することが出来るし
また知は利益に必要であり
利益は己がものどもに (必要である) からだ。

(18) (第) 8 に問うた

問うて曰く「祭枝 (バルソム)⁽⁸⁶⁾ をもつ左手 (のこと) は、
それについて
デーナの教訓 (アングルズ) は明らかです。(では) 人 (々) が左手で
携えるわけは何ですか」と⁽⁸⁷⁾。

86 Av.barəsmān, MP.barsom, NP.barsam/ baresman. ゾロアスター教の祭りに神官が用いる祭儀用具。起源的には、祭儀を行う聖域に敷いた草の束を、祭主が携えたものと考えられる。初期のゾロアスター教では、ハオマの小枝を束にして使用した。現在では、金属製の棒で代用している。必要なバルソムの数は、執行する祭式に応じて異なる。ヤスナ祭式の場合は、23枝。21枝を束にして神官が持ち、1枝は(豊穡を意味する)三日月型のバルソム台に置き、1枝はゾーフルを満たした敷き皿に浸ける。この他、ウィーデーウダード祭式とウイスペラド祭式の場合は、35枝。パーズ祭式の場合は、5枝など。使用方法は、ヤスナ祭式に準じる。教義的には、植物界を象徴し、創造主への感謝を意味する。サーサーン王朝時代には、神官階級以外も、挨拶や食事の際にバルソムを翳した。J.J.Modi, *The Religious Ceremonies and Customs of the Parsees*, Bombay, 1922, pp.277-86参照。

87 バルソムについては、中央アジア出土のオクサス遺宝とバクトリア遺宝が重要である。これらは、紀元前6-2世紀のソグディアナ(オクサス遺宝には、ハカーマニシュ王朝時代の様式が顕著である)とバクトリア(バクトリア遺宝には、ヘレニズム時代の様式が顕著である)で制作されたと見られる神殿遺宝で、①金箔を施した銅製のバルソムや②宗教的な金属製奉納板を含む。①より、中央アジアの宗教儀式(ゾロアスター教と非常に類似しているが、同一とは断定できない)では、かな

答弁

さて、太陽は東から昇るので<人が

東に向けば>

北が左(手)となり、人が西に向いて右手(dašn)が

北になると左手(hōy)が

南になる。このことの類例は 太陽に向く人に

見られる

即ち彼等の顔が西に向いて右手(dašn)が

北になるものでは左手が南になる(bawēd)ということ

である。(まさに)知るべきは(このこと)、曰く

バルソムを供える左手こそは、よって以て神々を祀るものとは

善

教の訓戒だということ。このことは「人が、オフルマズドの御裁

り早い段階から金属製のバルソムを使用していたことが判明した。また、②の奉納板の中の数十枚には、神官・俗人・女性が、バルソムを持って祈願している様子が描かれている。これによって、古代中央アジアの宗教儀式では、神官だけでなく俗人や女性までもが、バルソムを用いて祈願していたことが判明した。但し、オクサス遺宝の奉納板に描かれた図では、バルソムは殆ど右手で持たれているのに対し、バクトリア遺宝の奉納板に描かれた図では、バルソムは殆ど左手で持たれている。両者の相違は時期的なものか、地域的なものか、判然としない。ただ、バクトリア遺宝に示された宗教儀式の方が、サーサーン王朝時代のゾロアスター教のバルソム活用と一致している。『古代バクトリア遺宝展図録』, MIHO MUSEUM, 2002年, pp.63-65, 74-84 (図板), 165, 169-171参照。

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その2
きに叶う、よき方側の他の肢分⁽⁸⁸⁾とともに、左手で携え

(dārēnd or dāštan) そして勝利
に登着するもの」と言われているところのものである。

第17ページ転写

(19) 9 pursīd

<pursīd> kū ān ī abar xwaršēd [ud] pad ul waxšiš-

nīh ud pad-iz

+pari⁽⁸⁹⁾ nāmīhišnih [ī] 3 kišwar <ud> nēm rōšēnīdan

paydāg čim

čē ‘:

passox

hād zamīg abāg hām pērāmōn parwastagīh⁽⁹⁰⁾ i Alburz

88 つまり、左側の肢分。

89 写本では、plyb とあるが、このような単語は在証しない。Munasce[1973:39]は、この単語を emend して、frāšm=coucher と解している。おそらく、直前の一文、pad ul waxšišnih=「日の出によって」とバラレルと見て、pad-iz frāšm nāmīhišnih=「日没によって」ととる為である。しかし、「太陽が地上を照らす」ことの理由として、「日没で」は無理である。ここでは、pari と解し、全体として「(テラグ山を) 回ること」ととった。この方が、「太陽が照らす」ことの理由としては、整合性がある。「テラグ山」については、翻訳の方の文化史的注釈を参照。

90 写本では、plwstkyh とある。Munasce[1973:40]は、frawastakih と転写しているものの、翻訳はしていない。ここでは、pariwastagīh=「全周囲」と解したが、確証はない。

[ī]

girdih zamīg daxšag az Dēnkard paydāg 3 kišwar

ud nēm

nēmag ī 7 kišwar zamīg ast[ī] girdih ī zamīg rāy

xwaršēd [ud] +rawānīg hamē nēm pad payrōg ud

brāh <ud> bām rōšn-

ēnīdan bawēd ∴ (止)

(20) 10 pursīd

pursīd kū ka abar draxt sar kē azēr pad draxt

bun pādyābīh ast [ud] +nasā ī mardōm ayāb sag

wēnīhēd

paymānag ī az nasā ō ān pādyābīh pad ĵud

az

abar šudan ī ō ān draxt ud bīm ī pad rēmāñh ud

ast-iz ī

margarzānīh ī pad ĵumbēnīdan ī ān +nasā čār čē ∴

passox

hād ka ēd +huwēnīhēd čār ān ī abar +šudan⁽⁹¹⁾ ī

91 写本では, šn'ytn' とある。文脈上は, 「空中をよく見て測る」がかかる語が要求

wēnišnig andar wāyīg hu-abarih⁽⁹²⁾ paymānag u-š
abzār čašm ud
čōbīzag⁽⁹³⁾ +wēzam⁽⁹⁴⁾ ∴ (止)

(21) 11 pursid

<pursid> kū mardōm pat xwēš kunišn pad čē
Ohramazd xwēš

第17ページ翻訳

(19) (第) 9 に問うた

問うて曰く「太陽が上昇する

ことにより、且つ又 (テーラグ山⁽⁹⁵⁾) 周回

される。Munasce[1973:40]は、šnāxtan=reconnaître としている。しかし、これだと、直前の abar との整合性がない。ここでは、šudan ととり、abar šudan で「(樹に) 登る」と解釈した。

92 Munasce[1973:40]は解釈しきれなかった語だが、abar šudan=「(木に) 登る」と解釈するなら、hu-abarih=「巧みに (木に) 登る」ととれる。

93 原義は「木の棒」だが、ここでは「物差し」ととった。

94 写本では、NSHAWYNM とある。Munasce[1973:40]は、NSHWN-tk=on brandit と解している。しかし、写本を生かすなら、NSHWN-m=wēzam とし、「私は投げる」とあるべき。

95 Av.taēra, MP.tērag. 原義は「山の頂上」。アヴェスター語の段階では、イランの神話上のアルブルズ山脈の最高峰を指す。特に、「ヤシュト」第12章第25節で言及され、太陽、月、星は、この山の周囲を回っているとされる。しかし、パフラヴィー

することによって、3洲と半ずつを照らすことについて

明かされていることの理由は
何ですか」。

答弁

さて、アルブルズ⁽⁹⁶⁾が全周囲を取り巻いている地界は

円形が^{ちかい}地界の特色であること、Dēnkard から明らかである。

3洲と半

は7洲（から成る）地界の半分である⁽⁹⁷⁾。地界が円形なる故に

語の段階では、語義が変化する。即ち、『イラン版ブンダヒシュン』（TD1:45）には、「アルブルズの山脈は世界の周囲に横たわり、テラグの山は世界の中央に横たわる。太陽は…テラグ山の周囲を運行する」とある。この場合、テラグ山は世界の中心に聳える最高峰であり、アルブルズ山脈は世界を圍繞する地界の外輪（インドの鉄函山と同じ）である。

96 Av.Harā bərəzaitī, MP.Alborz. 起源的には、春分の正午にガナーグ・メーノーグ悪魔が世界に侵入した際に、大地震が起こって隆起した神話的な山脈を指す語。実際には、それぞれのイラン系部族が定着したイラン高原各地での峻厳な山を指す呼称なので、正確な地名を比定することは困難である。アヴェスター語では、ヒンドークシュ山脈の西端を指したと考えられる。しかし、パフラヴィー語の段階では、世界を圍繞する山脈へと語義が変化した。伊藤義教、『ペルシア文化渡来考』、岩波書店、1980年、pp.126-27参照。

97 ゴロアスター教の世界観では、世界は7つの洲（kešwar）によって構成されている。これらの7洲と太陽の運行の関係は、『イラン版ブンダヒシュン』（TD1:46-47）に詳しい。「太陽が最も長き日に昇るところの地点より、太陽が短き日に昇るところの地点までは東方（xwarāsān）であり、その洲はアルザフ（Arzah）である。太陽が短き日に昇るところの地点より、最も短き日に没するところの地点までは南方（nēmrōz）であり、その洲はフラダタフシュ（Fradatafš）とウィーダタフ

太陽は運行しつつ常に（地界の）半を 光と

光線と光芒を以て照ら

すことになるのである。

(20) (第) 10に問うた

問うて曰く「下方には木の根元に清浄なものがある、(そんな)

木の頂上に人や犬の死屍^{しし}が

見える時は、

その木に登るとか、けがれに対するおそれや

場合によってはその死屍を動かすことでマルグ・アルザーン罪になる

こともあるとか いうこともなしに、

シュ (Widatafš) である。太陽が最も短き日に入り来るところの地点より、長き日に入り来るところの地点までは西方 (xwarōbarān) であり、その洲はサワフ (Sawah) である。太陽が長き日に入り来るところの地点より、最も長き日に入り来るところの地点までは北方 (abāxtar) であり、その洲はウォールーバルシュト (Wōrūbaršt) とウォールージャルシュト (Wōrūjaršt) である。太陽が昇る時、それはアルザフ、フラダタフシュ、ウィーダタフシュの諸洲とクワニラフ (Xwanirah) 洲の半分を照らす。それがテーラグ山に入り来る時には、それはサワフ、ウォールーバルシュト、ウォールージャルシュトの諸洲とクワニラフ洲の半分を照らす。ここが昼の時、あちらは夜である。何故なら、テーラグ山の為に、夜が現れるのである。」なお、このクワニラフ洲は、7洲の中央に位置し、他の6洲の合計と同じ面積があるとされる。イランも、このクワニラフ州に属する。『デーンカルド』第3巻第19章は、この知識を前提としないと理解できない。伊藤義教、前掲書、pp.107-08参照。

その死屍から清浄なものへの法定測距の方法は何ですか」と⁽⁹⁸⁾。

答弁

さて、これ(ら)のものがよく見えるときは、(その)方法は

視線で空宙を巧みに登る法定則距という、(その木に)登る それ

(方法)であって、その要具たる眼と

ものさしを私は投げかける(木に向かって)ことにしているのです。

(21) (第) 11に問うた

問うて曰く「人は、己が行為において、何によって

Ohrmazd の有となり

第18ページ転写

ud pad čē Ohrmazd xwēš <w>āspuhragān⁽⁹⁹⁾ ud pad

98 ゾロアスター教では、死体は悪魔の攻撃に敗北した結果と考えられて忌まれる。特に、最も善性の高い人間や犬の死体は、それだけ悪魔に対する大きな敗北の証として忌避される。また、このような死体は不浄の感染力があると考えられ、近寄ることも避けられる。したがって、聖所や路傍に行き倒れや迷い犬の死体が転がっているような事態に遭遇すると、サーサーン王朝時代のゾロアスター教徒はパニックに陥った。同様の質問は、少しずつシチュエーションを変えて、『アードゥル・ファッローバイのリヴァーヤト』の第31-33章、37-50章、54-55章、63-65章の中に、繰り返し見いだされる。大抵、「犬を連れてきてその場を見せれば良い」と答えられている。Behramgore Tahmuras Anklesaria, *The Pahlavi Rivāyat of Āturfarnbag and Farnbag-Srōš*, 12, Bombay, 1969参照。

čē <yazadān> hāwand ud pad <čē>
az Ohrmazd xwēših [ud] bē <ud> pad čē bē-tar ud
pad čē
dēw hāwand bawēnd ˙˙

passox

hād mardōm pad xrad wizēn Weh Dēn āstawānih

Ohrmazd xwēš ud pad Weh Dēn andar-tarih Ohr-
mazd xwēš

wāspuhragān <ud> pad Weh Dēn andar-tōmih
yazadān hāwand [ud pad

Weh Dēn andar tarih Ohrmazd xwēš wāspuhragān
pad Weh

Dēn andartomih yazadān hāwand]⁽¹⁰⁰⁾ ud pad Weh

Dēn <an>āstawānih az

Ohrmazd xwēših bē <ud> pad wattar Dēn +āstawān-
ih⁽¹⁰¹⁾ az Ohrmazd

99 wāspuhragān の原義は、「特別な者」。ここから転義して、一般に使われる「宮廷の者、貴族」の意味が派生した。ここでは、「オフルマズドの宮廷の貴族」との意識も可能。

100 上と重複している部分。コピーストのミス。

101 写本では、'stwb'nyh とある。これだと、āstawānih=「信仰告白」以外に読みようがない。しかし、善教に対して使われるこの語が邪教に対して使用されるのは、不自然である。意味上からは、antar の比較級を抽象名詞化した andartarih=「よ

bētar ud pad wattar <Dēn> andartomih dēw hāw-
and bawēnd ∴ (止)

(22) 12 pūrsīd

pūrsīd kū ka ruwān ī mardōm +rōšn-stī⁽¹⁰²⁾ ∴ ud
+rōšn-
stī ō +tār-stī waštan nē šāyēd <abar> +wiftag
ud wif<tag>ēnīdag⁽¹⁰³⁾
mēnōg dēw frāz būdan ān ī ahlomōyān ruwān
abar andar ēn
zamīg frōd dwārīdan ī pad jeh-hirb ī šēbāg ī
Abestāg gōwēd čim ∴

passox

hād dēw be frāz bawēnd abar wiftag ud wif-
<tag>ēnīdag
gōwēd nē <wi>hīrišn [hīrišn] ī-šān ruwān ō

り(邪教に)帰入する」がくるべき。これなら、次の andartomih=「最も(邪教に)帰入する」に対応する。写本のコピーストのミスではなからうか。

102 Av.stī, MP.stī. パフラヴィー語で「存在」を表す語。rōšn-stī で「光明的存在」。対義語が、tār-stī で「暗黒的存在」。

103 写本では、wsptk' w wspyntk とある。しかし、このような単語は在証しない。直後に、淫売女魔のジャヒーが言及され、セットで最も忌むべき所行とされているので、ここは wiftag'='男色'の能動形と受動形と解釈した。

dēw bē

frāzdar būd ī-šān pad [rāy] grāy-warzīdārīh dēw

ō ruwān čiyōn ahlawān ruwān yazadān frāz

awiš ud dewān abāz

第18ページ翻訳

また 何によって Ohrmazd の特別な有となり、また何
によって神々と同等者となり、また何
によって Ohrmazd の有たることから離れ、また何によって更に
離れ そして何によって
dēw と同等者となるのですか」と。

答弁

さて、人は、知慧で選び善教に帰依することによって

Ohrmazd の有となり、また善教に更に帰入することによって Ohr-
mazd の特別の

有となり、そして善教に最も帰入することによって
神々と同等者になる ^{〔104〕}

]しかし善教に

帰信せぬことによって Ohrmazd の

104 以下の原文3行は、上と重複している部分。

有たることから離れて、また邪教に帰信すること
によって Ohrmazd から
更に離れ、そして邪教に最も帰入することによって dēw と同
等者となるのである。

(22) (第) 12に問うた

問うて曰く「人間の魂は光明的存在であり、また
光明的
存在は暗黒的存在に変化することはできないのに、男色
と被男色に
メーノーグ魔が耽溺し、異教徒どもの魂が疾足^{しっそく}の妖婦

(jeh)⁽¹⁰⁵⁾ の姿でこの地界に降下してくると
アヴェスターが述べているのはなぜか」と。

答弁

さて、(諸) 魔が男色と被男色に耽
溺していると (アヴェスターが)
述べているのは 彼等の魂が魔に変化
するのではなくて
彼等の誘引力が働くために 魔が (彼等の) 魂に さらに前

105 Av.jahī-, MP.jeh.ゾロアスター教では、男性を誘惑する女悪魔の首領。欲望の女悪魔 Āz との関係は、判然としない。

進してきた

ことであるのは 宛も天則者たちの魂 — 神々がそれに前

進んできて諸魔がそれから乖離する

第19ページ転写

aziš owōn druwandān <ruwān> dēw frāz awiš ud yaza-

dān [ud] abāz aziš

bawēnd ʾ ud ruwān [ud ruwān] ī druwandān

andar dušox pad frāz-nazdīh ī

dēwān awiš ast ī kirm ast ī wazay ud ast ī gaz-

dum

ud <ast>ī ōgrī(?)⁽¹⁰⁶⁾ ud ast ī karbunag ud ast ī

ḡeh kirb paydāg

ud ān ī wiftag ud wiftagēnidag ruwān pad

frāz-nazddomīh ī

dēwān awiš paydāgīh pad ān ī zištīlar dēw ʾ:

ud ahlomōy <ī> frēftār ruwān frōddom ī az

dušox paydāgīh

pad ān ḡeh kirbīh dwārīdan [ī] ud nē wiftag

ud wif<tag>ēnidag frāz-

domīh ī dēwān ō ruwān ud nē-iz ahlomōy ī frēf-

106 写本では、'wgr'y とある。正体不明の単語で、ogri は仮の転写。蛙、蠍など、ゾロアスター教にとってマイナスイメージの動物と並んで列挙されているので、同様の両生類・爬虫類の一種と推測される。

tār

jeḥ kirbīh ī ruwān wardišnih ī ruwān gōhr ast ∴

(止)

(23) 13 pursīd

pursīd kū ka kunišn-bōxtišn ī Gayō[k]mart az

ān ī

Abestāg gōwēd kū pad-iz ān gōwišn ī aršōxt⁽¹⁰⁷⁾ Gayō[k]-

mart

ō ān ī Amahrapandān hu-axwīh⁽¹⁰⁸⁾ abar mad ānī-š

čimīgih ī

Rōšn būd kē guft kū ān xwad Garōdmān dād

ēstād ō padiriftih pad čašt čāšiśnih čimīg

mad ∴

passox

hād dahišn ī Gayōmart ō gētīg andar ēbgatīg

107 写本では、'lšwht' とある。正体不明の単語で、aršōxt は仮の転写。こう形容される「言葉」によってガヨーマルトの救済があるのだから、「正義の」などが予想される。

108 Munasce[1973:42]は、この語を l'existence と訳しているが、不可。まず、接頭辞の hu- を訳していない。また、axw には、「存在」の他に「世界」の語義がある。「ガヨーマルトが上昇する果て」なのだから、「善なる世界」と訳すべき。

abēzagih ī gētīg čiyōn Garōdmān būd rāy Garō-
dmānīg dād⁽¹⁰⁹⁾
ēštād guftan ī Gayō[k]mart az ōy dastwar
padirēndēh ud ō
kunišn-bōxtišn ī Gayō[k]mart ēbgatīgih
būd guft ēštād
nē hanbasān har 2 pad rāstīh padiriftan
čāštan xūb ∴ (止)

第19ページ翻訳

ようなもので、まるで不義者どもの魂 — (諸)魔が それに前
進してきて神々がそれから乖離し
たもうようなものである。また悪界における不義者どもの
魂は 諸魔がそれに
近寄るために 或いは蛇、或いは蛙、或いは
さそり
蝎
また 或いは ōgrī (?), また或いは とかげ、また或いは
妖婦 (jeh) の姿としてあらわれる。
そして男色者や被男色者の魂は
諸魔がそれに最も
近寄るために 最も忌むべき魔としてあらわれる

109 Munasce[1973:42]は、ここに否定の nē を挿入しているが、その必要はない。こ
こに訳出したように、肯定文のままでも充分意味は通じる。

そして迷わし手なる異教徒の魂が悪界の

最深部で

妖婦の姿で徘徊するものとして現れるのも、はたまた男色者

や被男色者 — 諸魔が

(彼等の) 魂に最も近づくのも、さらにまた迷わし手なる破義

者 — (彼等の)

魂が妖婦の姿をとるのも、魂の実質(実体)が変化するものである

ことではないのです⁽¹¹⁰⁾。

(23) (第) 13に問うた

問うて曰く「Gayōmart⁽¹¹¹⁾が行為によって救われたのは

110 ゴロアスター教では、①個人の死去に際してチンワトの橋を渡る個人的審判と、②最終復活(フラッシュゴルド)に際しての終末論的審判の2種類がある。①に際しては、死者の靈魂は現世での善悪に応じて天国・中間世界・地獄に赴くが、②に際しては、善が悪に勝利し、全ての靈魂が天国へ赴く。最も忌むべき男色者や売春婦でも、その靈魂は光明的存在であり、悪魔によって一時的に曇らされていると考えるからである。

111 Av.gaya marētan, MP.Gayōmart. NP.Kayūmarth. 原義は、「死すべき生命」。ここから転義して、イラン神話上の「最初の人類」を指すようになった。『イラン版ブングヒシュン』によると、オフルマズドによって、悪と戦う為に、縦横同サイズの円形で輝く存在として創造された。(甚だ人間離れた形態である。)当初は不死だったが、アフレマンが派遣した死の悪魔の襲撃を受け、30年の闘争の果てに戦傷死した。しかし、彼の精液は大地に吸収されて、そこから一本の樹木が生え、その樹木からマシュヤグとマシュヤナグの兄妹が誕生し、人類の始祖になったとされる。また、『デーナカルド』第7巻によると、彼は火から生まれ、最初に神の言葉を受け取った預言者になったとされる。しかし、彼が死後にガロードマンへ赴いたとの記述は、現存『アヴェスター』やパフラヴィー語文献には見いだせない。

アヴェスターが『正語? ⁽¹¹²⁾の言によってガヨーマルトは

アマフラスパンドの善界に上昇した』と述べているということ

から出てくるのに、そのことの重要性 — それは (i)

『かのガロードマーン⁽¹¹³⁾自体すでに創出されてあった』と述べて

いるのが Rōšn⁽¹¹⁴⁾だったということ —

なお、イスラーム時代の神学者シャフラスターニー (Shahrastānī) は、著書『諸宗教と分派の書 (Kitāb al-Milal wa al-Niḥal)』の中で、古代イランの宗教の一つとして、「ガヨーマルト教」を挙げている。

112 転写の注107を参照。

113 GAv.garō.dəmāma-, YAv.garō.nmāna-, MP.Garōdmān. 原義は、「歌の館」。ここから転義して、パフラヴィー語では「天国 (wahišt)」の最上層の意味で使われるようになった。例えば、『アルダー・ウィーラーフ・ナーマグ (Ardā Wirāf Nāmag)』の第7章以降では、下から順に「地獄 (dušox)」、「中間世界 (hammistagān)」、「天国の第一段階=星の世界 (humat)」、「天国の第二段階=月の世界 (hūxt)」、「天国の第三段階=太陽の世界 (huwaršt)」、「天国の最終段階=ガロードマーン」と分類されている。このガロードマーンは、光輝に満ちた世界で、オフルマズドとアマフラスパンドたちはここに住まっているとされる。

114 この Rōšn は、一般名詞としての「輝くもの」ではなく、当時のダストワル職にあった人名と解すべきである。但し、ダストワルと云う高位の神官の本名に敬称を付さないことには、説明が必要である。『デーンカルド』の最初の編集者アードゥルファッローバイ・イー・ファッロフザーダーンには、長男としてローシャン・イー・アードゥルファッローバヤーンがいた。このローシャンの著作は、多くのパフラヴィー語文献に引用されているし、彼の事跡は、パフラヴィー語文献『疑惑追放論 (Škand Gumānīg Wizār)』第10-11章で言及されている。しかし、この時既に「故 (hu-fraward)」を冠されているように、父親に先立って夭折したようである。(因みに、指導者職は次男のザルドシュトが継承し、指導者自ら背教してイスラームに改宗した。この時、父親の書き溜めた『デーンカルド』を、一端破棄したと伝えられる。) 本文で言及される Rōšn とは、アードゥルファッローバイの長男のローシャ

が受容られるように教えて教えることが重要になったとは？」と。

答弁

さて、ガヨーマルトが、ゲーティグ界が仇敵から（まだ）

清浄状態にあったとき、（その）ゲーティグ界に創出されたことは

宛もガロードマーンが存在したが故にガロードマーン行きのものが創出されていたと述べるようなもので、ガヨーマルトはかのダストワル⁽¹¹⁵⁾（=Rōšn）に従って受け入れるべきである。そして

ガヨーマルトが行為によって救われたということに、敵襲が起こったと述べられていることは

矛盾しないのです。両者はともに正しいこととして 受け入れるように教えることがよいのです。

ンを指すと考えられ、著者が父親だった為に、敬称を付さなかったと類推される。ポスト・サーサーン王朝時代の指導的の神官の系図については、Behramgore Tehmurasp Anklesaria, *Vichitakiha-i Zatsparam with Text and Introduction*, Part 1, Bombay, 1964の序文参照。特に、ローシャンについては、p.xxii 参照。

115 Olr.*dasta-bara-, MP.Dastwar, NP.Dastūr. パフラヴィー語のダストワルは、「権威ある者（物）」を指す普通名詞。サーサーン王朝時代のゾロアスター教に使われる場合は、最高位の神官、判事、教義、デーンを表す。特に、法律文献の中では、ダストワルは「判事」を指し、抽象名詞 dastawarih は常に「法的権威、（ゾロアスター教法の）裁き」を指し示す。他方、他宗教に関して使われる場合は、「邪教の頭目」を表す。サーサーン王朝滅亡後は、パールスィーの中で、モーベド、ヘルベドに優越する最高位の神官のタイトルとしてのみ使われた。

(24) 14 pursid

pursid[an] kū gōwišn ī 2 dastwar abar Gayō[k]mard

ēk kū andar ēbgatīh 30 sāl zīwist ud ēk kū mad

ēbgat pad gyāg murd ān ī ēk ō did hanbasān

paydāg

har 2 padīriftan čāštan čim ʾ:

passox

had ān gōwišn andar pāyag ī ō mardōm rōy

āgāhīh ast az ān Abestāg ī mardōm rōnīhā āgāhīh

ast har ēk abar sahišnīg andar hamānāgīh ī

andar šāyīd<an>

ōftēnd har 2 abar ēk wimand ō ham gōwišnīh

mad ēstād

rāy nē hanbasān guftār ud andar hampāyag

ōftēnd ud wimand ōftēnd

ī-šān guftan ud padīriftan ud čāšīdn ēdōn čimīg

čiyōn čimīgīh ī abārīg ī wirrōyišnīg āgāhīh ī tis ī

az Weh Dēn [ud] dastwarīh bē guft ēstēd ∴ (止)

(25) 15 pursīd [kū]

<pursīd kū> mānāg ud mānāgdar-iz ī andar Abestāg

pad ēw-kardīh ī Dēn

abāg Yaθā-Ahū-Vairyō[k] pad nazd gōmišnīh ī

āgenēn gōwēd

pad 2 wašt az gāh bōzišn čē ∴

passox

hād [hād] mānāg [ud mānāgdar] ī andar Abestāg ēw-

ka-

rdagih ī Dēn abāg Yaθā-Ahū-Vairyō[k] ud mānāgdar

abar wisāndan

nē šāyistan ī Dēn az Yaθā-Ahū-Vairyō[k] čiyōn

wisāndan⁽¹¹⁶⁾ šāyistan ī

wars az sar ī mard ud ēk ō did nē hanbasān ∴ (止)

第20ページ翻訳

116 写本では、ws'ndn' とある。Munasce[1973:43]は、これを NSHtn と emend した上で、arracher と訳している。おそらく、アラム語の 3 語根 nsh と読んで、パフラヴィー語の wēxtan=separate に当たると解釈したと考えられる。語義は、これでよい。しかし、この語義を導くなら、敢えてイデオグラムと解釈しなくとも、写本のまま、wisāndan=separate と解した方がスムーズである。

(24) (第) 14に問うた

問うて曰く「ガヨーマルトについての2人のダストワルの発言は

一つは曰く『敵襲の中で彼は30年生き永らえた』と、また

一つは曰く『仇敵が

来て立ちどころに 彼は死んだ』とあって 相互に矛盾している

ことは明らかです。(それなのに)

二つとも受け容れるように教えるのはなぜですか」と⁽¹¹⁷⁾。

答弁⁽¹¹⁸⁾

さて、その発言は立場において人間のほうに顔の向いた

啓発(通報)⁽¹¹⁹⁾であり、かの Avestā の、人間のほうへの啓発から

117 『イラン版ブンダヒシュン』第4章第25節によれば、ガヨーマルトは、善と悪の混合開始から30年間、「時間(Zurvān)」の庇護のもとで生き永らえたとされる。これに対し、ガヨーマルトが悪魔の侵入と共に即死したとの情報は、現在伝えられていない。『デーンカルド』第8巻によると、『アヴェスター』中の失われた巻、Čihrdād Nask が、ガヨーマルトに関する記述だとされる。或いは、この巻の中に含まれた情報か？

118 Munasce[1973:42]は、この答弁の翻訳を殆ど省略している。その分、文意は通っているにしても、削除が多いことを知るべきである。ここでは、整合性をもって全文を解釈しようと努めた。

119 原語は、「paydāg=啓示」ではなく、「āgāhīh=知識、情報」である。『アヴェスター』に直接説かれた内容よりは、一段聖性の低いパフラヴィー語文献に説かれた内容と解釈するべきである。

(出ているの)

です⁽¹²⁰⁾。(だから) どちらの一つも、同等なるものであるとみるべき点において(どちらも)可能であるということに
落着するのです。両者とも(同)一の領域について同じ(又は、im この)発言に到達していた
わけですから、(相互に)矛盾していない言い方であって同じ立場
に落着しているのです。それら(両方)の領域が落ち合っている」と言い かつ容認し かつ教えることの重要なのはこのよう
うです、即ち
善教のダストワル性に従って言われている事物の、その他の信ずべき啓発(情報)が重要であるようなものです。

(25) (第) 15に問うた

問うて曰く「Dēn が Yaθā-Ahū-Vairyō と一体をなしている

(合致している) のに⁽¹²¹⁾

相互の近接さを表現するのに Avestāで類似しているとか、より

類似しているとも言っています。(このように)

記載箇所によって二つに変化している口実(bōzišn)は何ですか」と⁽¹²²⁾。

120 文意は明瞭でない。ここでは、前者(30年説)は人間向き=人間の時間尺度の説で、後者(即死説)は神々の時間感覚の説であると解した。前者を āgāhih=知識、情報と称していることが、その根拠である。

121 注33参照。Yaθā-Ahū-Vairyō 句はゾロアスター教最大の聖呪とされ、この中にゾロアスター教の教義が全て籠められているとされる。デーンとアフナワルヤ句が一致するとの言葉は、このことを指す。

122 Munasce[1973:43]は、この部分を訳していない。

答弁

さて、Avestāでいっている 類似しているとは Dēn が Yaθā-

Ahū-Vairyō

と一体をなしているということ（一致していること）であり、また、より類似しているとは

Yaθā-Ahū-Vairyōから、例えば

人の頭から毛髪を切りはなすことができる

ようには、Dēn を切りはなすことはできないことについて（云われているもの）です。だから（どちらも）互いに矛盾してはいないのです。

第21ページ転写

(26) 16-om pursīd

pursīd kū dūrihī nasā ī mardōm <ud> sag az

pādyābīh

30 gām ud daštān zan 15 gām +wēš rēmanīh ī

mardōm

ud sag nasā az daštān +zan freh az 30 gām pad

wēnišn

zanišnīhī daštān zan ō pādyābīh ī-š handāmān

+wēš

rēmanīh[ī daštān zan] az mardōm ud sag nasā

paydāg

čim čē ˙˙

passox

hād mardōm ud sag nasā grā<y> dar rēmanih [ī] az

daštān zan paydāg freh az 30 gām pad wēnišn

zanišnīh <ī>

daštān zan ō pādyābih čim zēnīg čīhrīg dwāris-

tan ī

nasuš abar daštān zan ud pad nasūšišnōmand wēnišn

ī ān zan

bē +ayāftan +ī ō pādyābih ī-š didār [ud] akārīh ī

pād-

yābih aziš čiyōn abāg dām padīrag wād xwār

mād<ag> ī gand

sāxttar ō wēnīg bē ayāftan ī az padīragan hūm

wād <ī>

škefttar-iz gand 止⁽¹²³⁾

第21ページ翻訳

(26) (第) 16に問うた⁽¹²⁴⁾

問うて曰く「人と犬との死屍の、清浄物からの距離は

123 Madan 版第21ページの第16行目まで。

124 弟子たちの質問は、第1問から始まり、この第16問で終了。

30歩⁽¹²⁵⁾、また生理中の女性（の、清浄物からの距離）は15歩⁽¹²⁶⁾。人と
犬との死屍のけがれは
生理中の女性よりも多いのです。（しかるに）30歩以上（の距
離）が、生理中の女性が
見たり叩いたりするのに、清浄物に対しては（必要）で⁽¹²⁷⁾、その
（彼女ら）の四肢（肢体）には
人や犬の死屍よりもより多くのけがれがあると
明かされている⁽¹²⁸⁾
理由は何ですか」と。

125 人間の死体をどう扱うべきかについての規定は、『アヴェスター』第19巻「ウィーデーウダード」第8章に詳説されている。それによると、人間の死体は、「聖火から30歩、聖水から30歩、神聖パレスマンの束から30歩、信者から3歩離れるべし」（第7節）とある。

126 生理中の女性をどう扱うべきかについての規定は、『アヴェスター』第19巻「ウィーデーウダード」第16章に詳説されている。それによると、生理中の女性は、「聖火から15歩、聖水から15歩、神聖パレスマンの束から15歩、信者から3歩離れるべし」（第4節）とある。

127 「ウィーデーウダード」には、この規定はない。生理中の女性は、「家から隔離して、聖火を見ないようにすべきである」（第16章第2節）とあるのみ。

128 ゾロアスター教の神話的では、生理は女魔ジャヒー（注105参照）の創造物とされる。また、ゾロアスター教で生理中の女性が不浄とされるのは、教義的には以下のように説明される。即ち、人間や犬の屍は、かつて生命をもって悪と闘争した善の勢力の敗北の証なので、不浄である（注98参照）。これと同様に、女性の生理中の出血も、悪との闘争に於ける敗北の結果、生命をもっていた血液が死物になったものと見なされる。この意味では、抜けた毛髪や切った爪なども不浄と考えられており、「ウィーデーウダード」第17章には、それらの処理方法が詳説されている。しかし、毛髪や爪の不浄よりも、周期的に出血のある女性の方が敗北の度合いが大きく、より不浄と考えられている。

答弁

さて、人や犬の死屍が生理中の女性よりも感染力の大きい
けがれをもっていることは明らかです。その生理中の女性が見たり
叩いたりするのに 清浄物に対し
30歩以上もの（距離が要る）理由は屍魔が武器
に訴える本性から
生理中の女性に奪取すること⁽¹²⁹⁾、その女性が屍魔のとりついた
眼で
清浄物にとりつくこと、彼女の邪視⁽¹³⁰⁾がそのために
清浄物の無力
化となることであり、あたかも創造物が向かい風（風下）
にいと軽い臭気の物が、
臭気の極めてつよい、吹きつけてくる（風上からくる）放屁
よりも、もっとつよく
鼻にくるようなものです⁽¹³¹⁾。

129 屍魔は、主に生理中の出血に取り憑くとされる。

130 原語は、*didār*である。この語の通常の語義は「凝視」だが、ここは文脈上、「邪視」でなくてはならない。「邪視」は、『ヴェーダ』以来、インド・イラン語族全般に古くから確認される信仰で、神・人間・動物が、視線を投げかけただけで、意識的・無意識的に相手に災いをもたらすとする。『アヴェスター』では、*agaši-*という女魔の仕業とされる。パフラヴィー語文献では、*duš-čašmih*または*sūr-čašmih*の名称で頻出する。生理中の女性には悪魔が取り憑いているので、彼女の邪視には甚だ危険な威力があるとされた。

131 つまり、不浄の度合いそのものは、死体が生理中の女性を上回る。しかし、生理中の女性は、「邪視」によって危険なエネルギーを放出しているので、汚染を拡大する恐れは、生理中の女性の方が高いと説明している。